

～「愛されている」、そう思う子に育ててほしい～

その家に、赤ん坊が生まれ、初めての笑顔やちょっとした仕草で家族の心が和み、ひとつになる。人間社会の始まりです。

小さな命は、そこに居るだけで、人々をいい人間にし、道筋を示してくれる。
その命に、毎日話しかけ、言葉では返ってこない宇宙との会話が始まる。人間は、そうすることで、自身の心の声に耳を傾ける。
赤ん坊を抱くということは、時の流れの中で、流されないための重りを抱くようなもの。
その不思議な感覚を、ずっと覚えているといいのです。

親たちの、「可愛がる」喜びが、子どもたちの、「人を信じる力」につながっていく。子どもたちも、きっといつかあの「お守り」を握りしめることができる。

父親が、眠っている我が子に、「カラスなぜなくの」でいい、一人で唄いかけるといい。五日間も続ければ、父親の中で遺伝子がオンになり、心の許容範囲が大きく、深くなる。人間社会が整ってくる。

道端に咲いている小さな花に歌いかけるのもいいんですが、ハードルが高すぎるでしょう。眠っている我が子に、という入り口は、自然で、意外と素直に通っていきける。

奥さんに言われて、ご主人が実行してみようという気になる夫婦関係なら、すでに大丈夫。

うちはどうかな？ と思ったら、まずお母さんがやってみてください。眠っている子どもに一人で唄いかける。お母さんが不思議なことをやっている姿を父親が眺める。その姿に、父親が忘れていた「何か」があるはず。

夫婦という最小単位の「社会」には、「子育て」をしながら、こうして人類のコミュニケーション能力を高め、維持していく大切な役割があった。

自分の子どもの寝顔を眺めているだけでしあわせになれる。
子どもを可愛がってさえいれば、いい人生が送れる。
そういう簡単なことに気づけば、いいのです。

義務教育が存在する限り、子どもたちにとって大切なのは、それに早く気づく人の割り合いなんですね。

子は鎧（かすがい）と言いますが、実は「子育て」がかすがいです。わざわざ言わなくても、「子どもは育てられるもの」という意識が常識としてあった。この常識が最近、揺らいでいる。
こういう時代だからこそ、親心の絆（利他の心）を意図的に耕さなければいけない。
それには、幼稚園という場がいい。ここで過ごす時間が、一家の人生を支える時代です。

園長先生や保育者たちに、そうした子育ての秘密を、親たちに園で伝えてほしい、行事をいくつか組み合わせるだけで、親たちが生き返ってきます、と、お願いします。地域の幼稚園や保育園で、親を一人ずつ園児たちに漬け込む「一日保育者体験」をやるだけで、地域の小中学校の気配が変わってくる。
幼児を可愛がる、という「かたち」が土台にあれば、福祉や教育という「かたち」は崩れない。でも、そこが欠けると、生きる動機さえ壊れてしまう。

「ママがいい！」という本を書きました。
この言葉は、人類を導いてきた「勲章」です。
この言葉から生まれ、形づくられる、信頼の連鎖が「子育て」でした。ずっとそうでした。

なぜ学級崩壊が止まらないのか。教師が精神的に病み、成り手が減っているのか。最近、担任の先生の当たり外れがひどくなってきました。親に、可愛がって育てられた子どもほど、そんな時の、ショックが大きい。親たちの戸惑いや、悲しみも、大きい。

「アイデンティティー」の研究で知られる発達心理学者エリクソンは、乳児期に「世界は信じることができるか」という疑問に答えるのが母親であり、体験としての授乳があるとしました。それが欠けることで将来起こりうる病理として、精神病、うつ病を指摘しました。

学問の草創期にはこういう当たり前のことが、躊躇なく言えたのです。

私など、「ママがいい！」というタイトルにただで、中身も読まずに、「パパはどうなんだ！」「母親に子育てを押し付けるのか？」「性的役割分担の押し付け」などと言われる。子育ては競争ではないんです。

「ママがいい！」と言っているのは私ではなく、子どもたち。

彼らは嘘は言っていない。この駆け引きのない褒め言葉は、生きる動機や指針になる。この言葉に囲まれる人生は、確かで、幸せなのです。

パパは、ちょっと悔しいけど、「うちの子は、いい母親に当たった。ありがたい」と感謝すればいい。子育ては、そうやって母と子を中心に、家族が心をつにし、頼りあい、信じあって、自分は一人では生きられない、とみんなが噛み締めながらやっていくもの。

(本にサインする時、頼まれて、”パパもいい！”と加えることがあります、それも嬉しいです。)

—————保育施設における虐待の問題—————

最近、保育施設における虐待の問題が報道されています。そして、学校で、突然、先生の言うことを聞かなくなる、白といえば、黒、拒否の仕方が尋常ではない子が増えています。

彼らの短い人生で、いつ、反発や悲しみが、絶望や怒りに変わったのか、人間不信が決定的になったのか、誰も知らない。「知り得ない」ことが許せないのだ、と思います。(「ママがいい!」、ぜひ、読んでみてください。このままでは学校教育が維持できない、その事情を理解してほしい。)

幼い頃にあった、「先生(保育者、指導員、等々)」によって行われた、たった一日、たった数分の、「有ってはならない」出来事を一生抱え、苦しみながら生きていく子どもたちがいる。場合によっては、その子たちがすでに教師になっていて、陰湿なイジメを繰り返している。

義務教育という仕組みの中で、親が絶望的になる瞬間が増えているのです。教師不足で、校長先生もそれを止めることができない。

ニュース見て泣く子も… 日野市保育園“虐待” 卒園児の保護者らから「新証言」
<https://news.yahoo.co.jp/articles/36823a07c9d74790c526509e8535578a5f500a3b>

「てめえら！」響く保育士の怒鳴り声 “ブラック保育園” 急増の背景 (週刊朝日)
<https://dot.asahi.com/wa/2017052400011.html?page=1>

「バカ」「ブタ」と呼ぶ、正座させる 吐き出した給食、口に押し込む：
<https://mainichi.jp/articles/20190215/dde/041/040/017000c>

幼い頃、愛そうとした人に繰り返し裏切られた体験を、心に(PTSDとして)刻まれ、強者によって弱者が苦しめられる光景を風景として見続けた子どもたちが、相当数いる。自分が「愛されている」と思えないから、集団の中で抑止力が効かない。

その子の幼児期の体験を知り得ない担任にはどうしようもない、理解しがたい状況が増えているのです。

もし、担任がそこで努力をやめ、人生を諦めてしまえば、その子たちの存在は周りの子どもたちの人生をも変えていく。

義務教育が諸刃の剣になろうとしている。

「子育て」は、「可愛がること」。そして、「寄り添うこと」。
保育も同じ。
本当は、学校も、そうでなければいけない。

少子化で待機児童（0、1、2歳児）は都市部でもゼロになり、市場原理化した保育園が親サービスに走っています。地方では、公立が民営化され、親を叱れる保育者がいなくなっている。

保育園の数を増やし待機児童がなくなったので「一定の成果はあった」、と有名な保育の専門家が言いました。が、その一定の成果の陰には、無資格でも保育ができ、パートで繋いでもいい、という、幼児たちの記憶を細切れにする規制緩和がありました。認可の規定に満たなくても補助を出し、十一時間保育を標準と名付け、閣議決定で保育を「成長産業」と位置づけた、子どもの側からはとても「成果」と呼べない、母子分離の推進がありました。

エリクソンが言った、乳児期に「世界は信じることができるか」という疑問に答える主体が誰なのかが、「社会で子育て」という言葉でますます曖昧になっている。
その混乱の中で、「保育園落ちた、日本死ね!」と、誰かが叫ぶ。
国会議員たちが、その言葉を聴いて、興奮して口論をする。しかし、彼らの視点からは、とっくに乳幼児たちの「願い」が消えている。

国の0歳児保育促進で、幼い兄が妹と、弟が姉と、過ごす権利が奪われていったこと、その時、何が失われていったのか、想像力を働かせる者たちは、皆無でした。

20年前、「こんなのは『子育て放棄支援』です」と保育士たちが憤った、保育界の混乱と、取り返しのつかない良心の崩壊が、その「一定の成果」の影にあったのです。

「教員不足深刻、潜在教員活用へ（文科省）」読売新聞

<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20220713-OYT1T50181/>

「新年度も各地で厳しい『教員不足』の状況が発生しているとして、文部科学省は教員免許がなくても知識や経験がある社会人を採用できる制度を積極的に活用するよう全国に緊急で通知しました。」（NHK ニュース）

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220421/k10013592721000.html>

「発達障害」児童を急増させる社会風潮の正体：少子化でも特別支援学級が増える真の理由：（東洋経済 On Line：
<https://toyokeizai.net/articles/-/604154>）

（『文部科学省や各教育委員会が教員不足の大きな要因として挙げるのが、障害のある子どもが通う特別支援学級（以下、支援学級）の増加だ。直近10年間で小中学校全体の児童・生徒数は減少しているにもかかわらず、支援学級の在籍者数は2011年度の約15万人から2021年度には約32万人に倍増している。

支援学級急増の要因について、「障害に対する理解が進み、保護者も支援学級に入れることに抵抗がなくなったからだ」と文科省や県教委は口をそろえる』）

政府が経済政策として進めた「子育て支援」を、立場上否定できない文科省や県教委は、教員不足の背後にある本当の要因と向き合おうとはしない。だからますます教師不足、質の低下が加速する。

少子化対策と言いながら、0、1、2歳児保育を普及させ、子育てをイライラの原因のように言い、逆に少子化を進めてしまった「保育（雇用労働）施策」と同じ過ちを、再び繰り返す。現場の保育士の心を知らない専門家たちの助言で、「受け皿」の手を広げ、その結果、「児童虐待過去最多」というとんでもない状況を生み出しているのに、学校教育でも同じ過ちを繰り返そうとする。

乳児保育において、「理解が深まって、預けることに抵抗感がなくなる」と言う理屈と道筋は、幼児たちの願いに反していた。「ママがいい！」という、その願いから遠のけば遠のくほど、学校教育は蓄積された不満と、先送りされた負担に耐えられなくなり、教師も、辞めていく。教師の質の低下が、不登校児過去最多という結果になって表れる。

「ママがいい！」という言葉に真面目に向きあわない限り、流れは変わらない。
教師不足も止まらない。

—————赤ん坊が泣いていれば、その声を聞いた人の『責任』です。—————

日本の伝統文化

親たちの「可愛がる」喜びが、子どもたちの、「人を信じる力」につながる、と書きました。子どもをみんなで「可愛がる」ことで社会が整う、と確信したのは、「逝きし世の面影」（渡辺京二著）という本を読んだ時です。

江戸の末期から明治の初期にかけて日本に来た欧米人がこの国について書き残した言葉を集めた本です。どの中に、第10章（子どもの樂園）という章があって、本当の日本が見えてきます。

父親も母親も、特に父親が、子どもを可愛がる、甘やかす、叱らない。つい150年前、日本はそういう国だった。インドや中国をすでに見ていた欧米人が、その風景に驚いて、パラダイスと呼ぶのです。

（「逝きし世の面影」第10章より）

『私は日本が子供の天国であることをくりかえさざるを得ない。世界中で日本ほど子供が親切に取り扱われ、そして子供のために深い注意が払われる国はない。（モース1838～1925）』

『私はこれほど自分の子どもに喜びをおぼえる人々を見たことがない。子どもを抱いたり背負ったり、歩くときは手をとり、子どもの遊技を見つめたりそれに加わったり、たえず新しい玩具をくれてやり、野遊びや祭りに連れて行き、子どもがいないとしんから満足することがない。他人の子どもにもそれなりの愛情と注意を注ぐ。父も母も、自分の子に誇りをもっている...（バード）』

江戸は玩具屋が世界一多い街。朝、男たちが集まり赤ん坊を抱いて自慢しあっている。日本の子どもは父親の肩車を降りない。父親たちがいかに幼児と一体で幸せそうかが、繰り返し強調され、絵にも描かれません。日本の男、冬、と夏が描き分けられ、冬は着物で幼児を抱き、夏はふんどし姿で幼児を抱いている。父親と幼児は常に一体だったのです。

日本人は子どもを叱らない、罰したりはしない。教育しない。ただ大切にしているだけで、いい子が育ってしまう。欧米人にとっては、魔法のような子育てが書いてあります。これが、本当の意味での、「社会で子育て」なのです。

私たちはその「時の財産」をいまだに持っている。

『ワーグナー著の「日本のユーモア」でも「子供たちの主たる運動場は街上である。・・・子供は交通のことなど少しも構わずに、その遊びに没頭する。彼らは歩行者や、車を引いた人力車夫や、重い荷物を担った運搬夫が、独楽（こま）を踏んだり、羽根突き遊びで羽根の飛ぶのを邪魔したり、凧の糸をみだしたりしないために、少しのまわり路はいとわなないことを知っているのである。馬が疾駆して来ても子供たちは、騎馬者や駆者を絶望させうるような落ち着きをもって眺めていて、その遊びに没頭する。』

ブスケもこう書いている。「家々の門前では、庶民の子供たちが羽子板で遊んだりまたいろいろな形の凧を揚げており、馬がそれを怖がるので馬の乗り手には大変迷惑である。親たちは子供が自由に飛び回るのにまかせているので、通りは子供でごったがえしている。たえず別当が乳母の足下で子供を両腕で抱き上げ、そと彼らの戸口の敷居の上におろす」 こういう情景は明治二十年代になっても普通であつたらしい。彼女が馬車で市中を行くと、先駆けする別当は「道路の中央に安心しきって座っている太った赤ちゃんを抱き上げながらわきえ移したり、耳の遠い老婆を道のかたわらへト重に導いたり、じっさい10ヤードごとに人命をひとつずつ救いながらすすむ」のだった。』

単に時代がそうだったのではない。ヨーロッパではあり得ない風景ですが、欧米人が知っていた他のアジアの国々と比較しても、この国の「子どもを可愛がる」風景は驚くべきものだった。

私たちは、幼児を抱き上げながら、命を一つずつ救い、進む人たちだった。

みんなが、そうすることの「価値」を知っていた。だから、幼児たちはその役割に没頭できた。信じ切つて、頼り切つて、幸せそう、という、人間の完成した姿を体現できたのです。

欧米人は、神の国を見たのでしょうか。

イエスは弟子たちに、言いました。

「子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」

江戸では、赤ん坊の泣き声が聞こえない、と欧米人が書き残します。赤ん坊が泣いていたら、そこにいる人が「自分の責任だ」と思い、抱き上げる。それが、人間たちが調和し、安心して暮らしていく秘訣だった。それで全てが整い、解決した。

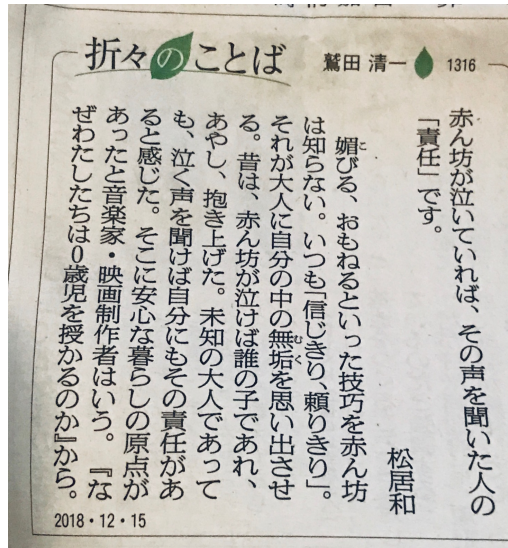
それぞれが、人間であることの「資格」を、抱きしめるのです。

著書「なぜわたしたちは0歳児を授かるのか」に「逝きし世の面影」について書いた私の言葉が、朝日新聞の「折々のことば」に紹介されました。

「赤ん坊が泣いていれば、その声を聞いた人の『責任』です。」：松居 和

媚（こ）びる、おもねるといった技巧を赤ん坊は知らない。いつも「信じきり、頼りきり」。それが大人に自分の中の無垢（むく）を思い出させる。昔は、赤ん坊が泣けば誰の子であれ、あやし、抱き上げた。未知の大人であっても、泣く声を聞けば自分にもその責任があると感じた。そこに安心な暮らしの原点があったと音楽家・映画制作者はいう。『なぜわたしたちは0歳児を授かるのか』から。（鷲田清一）

(2018.12.15)



新聞のコラムを読んだ、私が師匠と思っている園長先生から、メールが来ました。

「以前、心の清らかな人が保育園へ来て、子どものなき声を聞いて『あっ、誰かが泣いている！どこ？どこ？』と慌ててうろうろされたことがあった。なき声に慣れていた私たちは反省しきりでした。ありがとうございます！

(追伸)

その人は少し障害を持っていらっしゃる方でした。保育士たちと心が洗われた気になりました」

(ここから私です。)

仕組みによる子育てが広がると社会全体が「子どもの泣き声」に鈍感になる。園長先生はそれを言いたかったのです。人類に必要な感性が薄れ、遠のいていく。「心の清らかな人」の存在が一番輝く時に、その存在に気付かなくなってくる。

保育は仕事であってはならない。そんな風に自分を戒め、境界線の上を綱渡りのように歩いていく保育士たちがいます。慣れてはいけない、慣れてはいけない、と呟きながら。

園長は知っています。自分だって慣れてしまっていた。それは、その子の「親」ではないからです。

師匠は、いまだに目指している、「本当の保育士」を.....。

別の園長が、「一年目の保育士にかなう保育士はいない」と言っていたのを思い出しました。理屈でも正論でもなく、真実が、語られていた時代があった。それを伝えていくのは、聞いた者の役割です。

親は、常に一年目だった。

だからこそ不安で、だからこそ真剣。だからこそ信頼や絆が育っていった。そこで「専門家に任せておけばいいんだ」という心理が動いたら、保育は絶対にそれを受けきれないのです。

全員が幼稚園、保育園を通過していく。そこで親たちに子育ての喜びを実感させること、人生の輝きを幼児たちの中に見て、みんなで目的地を思い出すことができる。

そして、この同じ「折々のことば」に、最近、逝った父の言葉が載ったのです。

子どもが「本を読んで！」というのは「一緒にいて！」ということです。 松居 直

(紹介いただいた鷺田清一さんの言葉)

絵本を読み終えても「もう一回読んで」と言う。読んであげても心はお留守になっている。なのに読み終わるとまた「もっと」と言う。母親の気持ちが自分だけに向けられているというシチュエーションがきっと心地いいのだろう。子どもは「作者の名前は覚えていなくても、誰に読んでもらったかは、覚えているもの」だと、児童書の編集者は言う。『絵本は心のへその緒』から。

(2022.11.17)

絵本から得る「情報」も大事ですが、読んでもらう「体験」の中に、生きていくために必要な遺伝子レベルの「知識」の交換、伝承すべき物語があるのでしょう。

それを確かにするために、

絵の動かない、音を発しない、誰かに語られる「絵本」が、象徴的な役割を果たす、父は、そう信じた人でした。(「ぐりとぐら」など、たくさんの絵本を編集しましたが、「だいくとおにろく」「ピカくんめをまわす」などの文章も書いています。ちなみに、妹は、「わにわに」という不思議な絵本のシリーズを書いています。)

絵は、想像力の中で動くのです。心の中で、音さえも聴こえてくる。だからこそ、毎回ちがう体験になる。

言葉は、母親や父親の温もりと魂を得て、その時の臨場感は次元を行き来する。それが、いつか回帰できる、真の知識になっていく。

そんな感じでしょうか。

絵本の働きは、いま急速に私たちが失いつつある、だからこそ取り戻さなければいけない、利他の「営み」となってよみがえる。

毎月、親子で心待ちにする「月刊絵本」が大切なのだと、父は、言っていました。

一緒に待つ、という習慣が、すでに人生の土台をつくる「体験」です。月刊ですから、選択肢がない。

親は子を選べない、子は親を選べない、のと似ています。人生は、しばしば、選択肢のないものを一緒に待ち、共に流れに身を委ねてつないでいくもの。

「情報は知識ではない、体験が知識なのだ」とアインシュタインは言った。

講演で、お母さんに質問されることがあるのです

「どうやって子どもを育てたらいいんでしょう？」

うーん、これはその子に会ったこともない他人に尋ねることではないですよ。

以前過ごしたインドの村の風景を思い出します。そこではあり得ない質問だとわかるんです。

私は、言います。

「可愛がって、甘やかしていればいいですよ」

「甘やかしていいんですか？」

いいんです。

そして、「子どもが喜ぶますよ」と付け加えます。心の中で、神様がうなづきますよ、と囁く。

子どもを可愛がることによって、親たちが「ああ、自分はいい人間だ」と思うこと。それが一番大切な道筋です。

母子分離の影響

乳幼児期の母子分離が子どもの人生にどう影響するか、誰にもはっきりとはわかりません。

農業主体のアジアでは、母親は伝統的に重要な労働力です。乳幼児期、兄弟姉妹や祖父母に世話されたり、恵まれた家庭でも子守や乳母に育てられるなど、様々なケースがありました。母親と乳飲み子の世話をする人との間に、信頼があれば、必ずしも母親が育てなければいけない、などということはないのです。

ただ、三歳までの環境や体験が、将来を左右する脳細胞の仕組みが決まってくる要素であることはすでに定説になっています。

「特定の人間との親密な体験」は、その子の一生に影響を及ぼす、と言われていました。

そう認識されているからこそ、親（特定の人）を知り、その人と十分な時間を過ごすことの大切さが国連の子どもの権利条約でも「権利」として掲げられている。

（十一時間保育を「標準」と名付けたこの国の施策などは、完全に、子どもの権利条約違反です。）

加えて、幼児体験でその先の全てが決まるわけではありません。学校で、いい先生に当たれば、その出会いは、人生の中で永遠に価値を持ちます。一冊の本に出会う、とか、ある歌手のファンになることでも人生は変化します。

親友が一人寄り添えば、人生は、守られます。

一編の「詩」、母親の涙、祖父の笑い声、夕陽が沈む光景と島の伝説の組み合わせ、ペットとの会話に救われることもある。

音楽を演奏する時もそうですが、私は、そういう瞬間にならないだろうか、と講演に願いを込めます。

いい伝令役、橋渡し役になりたい、と本を書き、ブログを書き、フェイスブックを更新します。

「トトロ」や「千と千尋」、心が清くなければ雲に乗れない、というドラゴンボールが圧倒的に支持される国です。「男はつらいよ」という無欲の幸福論を提示する映画を四十八本続けて作った国なのです。

自然治癒力は、あちこちに、形を変えて存在している。

しかし、「子育て支援」と名付け国が行った積極的な母子分離政策が、親たちの「子育てにおける幸福感の減少」と、「子どもと過ごす時間を損失と感じる傾向」につながって、若者たちの生きる力の衰退、アイデンティティーの喪失に繋がっていったのは確かだと思います。

結婚しない、家庭を作ろうとしない若者が三割に近づくという数字に、それが表れている。

男女共同参画（競争）社会という掛け声で、男女がお互いの価値とアイデンティティーを確かめ合う機会、補い合う「生き方」が減らされていったのですから、子どもを欲しいとは以前ほど思わなくなるのは当然でしょう。

それでも、いいのです。

ここまで進めば、そう考える方が自然でしょう。

「おひとりさま」という選択は、それができる人たちにとっては気楽でしょうし、「引きこもり」という日本特有の現象も、親が親らしい時代の残照であって一概に悪いことではない。何より「自分で育てられないなら、産まない」という選択は、「人間らしい」。

けれども、経済界や政府、社会学者までもが、「少子化は困る」「致命的だ」と言う。子育てのイメージを散々悪くしておいて（責任の所在をすっかり曖昧にしておいて）、人類が一度も試したことがない母子分離の仕組みを無理やり進めておいて、いまさら何を言ってるんだ、と腹立たしくなります。

政府の少子化対策で、少子化は加速したのです。

その失敗を反省しないどころか、破綻した論理を、保育という仕組みに押し付けるから、保育も破綻してくる。そして、いよいよ学校が破綻し始めている。いい人材が去っていく。

私が、一番危機感を覚えるのは、政府主導のこの「生きる力の衰退」「アイデンティティーの喪失」が、あちこちで対立や軋轢を生み、調和を壊し始めていること。

少子化が進んでいるのに「児童虐待が過去最多」という数字にそれが表れている。

(福祉が人材的に限界に達し市場原理に走った結果どうことが起きるか。「ママがいい!」に書きました。NHK BS ドキュメンタリー「捨てられる養子たち」:

<https://www6.nhk.or.jp/wdoc/backnumber/detail/?pid=161027> が良い例なのですが、番組の紹介にこうあります。

「比較的簡単に父母になり、簡単に解消できるアメリカの養子縁組制度。毎年養子となった子どものうちの2万5千人が捨てられているという。子どもをペットのように扱う社会の暗部を描く」

報道も警告も、すでにされているのです。

「比較的簡単に父母になり、簡単に解消できる」社会がすでに海の向こうにある。親子関係を「簡単に解消できる」社会の入り口に何があったのか。「社会で子育て」と言いながら、大人の都合で福祉や学校教育に子育てを依存する、身勝手な社会があったのではないか。

考えてほしいのです。児童虐待過去最多に続き、介護施設職員による虐待も過去最多になりました。半数近くの子どもが未婚の母から生まれる欧米社会がたどった道筋を見極め、日本は踏みとどまってほしい。私の願いは、ただそれだけです。)

0、1、2歳児と時間を過ごすことは、「人生をどう生きるか」という問い掛けが丁寧に行われることでした。

子育てに、答えはないし正解もない。

こう育てれば、こう育つ、なんてことがあるなら人類はとっくに発見している。

オロオロしない親は育たない、と昔の園長たちは言いました。いい親でありたいと思った瞬間、その親はいい親なのです。オロオロする親は、とてもいい親なのです。

いい親は親の心持ちの問題で、子どもがどう育つかという「結果」とは別の次元にあるのです。

慣らし保育で「ママがいいー、ママがいいー」と叫ばれた母親は、自分がいい親だったから叫ばれたことを忘れないでほしい。その瞬間、自分の価値が、人生で一番高まっていたことを憶えていてほしい。

「子どもは三歳になるまでに、すべての親孝行をする」と言います。似たことわざが世界中にあります。

目的ではない。その過程に意味がある。

そう決めてしまえばいいだけのこと。幼児という「弱者」に癒され、いい人間にしてもらおう。浄化される道を選択してしまえばいいのです。自分の選択です。誰でもできる。そう選択した人の「割り合い」が、子どもにとっての環境です。

そしてもう一つ不思議なのは、子育ては、終わりのあるものでもないのです。

子どもが、お盆に、親の墓参りに来たら、親は死んでも子育てをしている。そういう次元のものなのです。

「詩的」な問い掛けを聴き分ける、感性を保つには

私が、親（夫婦それぞれ別々の日に）だけでなく、中学生、高校生、場合によっては教師たちにまで「保育体験」を進めるのも、一日、遊んでいる幼児に囲まれることで、人間が本来持っている感性、詩的領域におけるコミュニケーション能力を取り戻すきっかけになるからです。

長野県茅野市で、家庭科の授業で保育士体験に行く中学二年生に、幼児たちがあなたたちを育ててくれます、という授業をして私もついて行きました。生徒たちは、図書館で選んだり自宅から持って来た絵本を一冊ずつ手にしています。その絵本を選ぶ時から園児との出会いは始まっています。

男子生徒、女子生徒、二人ずつ四人一組で4才児を二人ずつ受け持ちます。四対二、これがいい組み合わせで、幼児の倍の数世話する人がいる、両親と子どものようです。四人いるとゆとりが生まれる。

二人が園児を一人ずつ膝に乗せて、一人が座って絵本の読み聞かせをする。もう一人の中学生は自分も耳を傾けたり、園児を眺めたりウロウロできます。この余裕が意外と大切に、祖父母の役割のようなものかもしれない。

馴染んできたところで、牛乳パックと輪ゴムを使ってびよんびよんカエルを作って、一緒に遊ぶ。

気づいたのですが、14歳は境界線上にいるのでしょうか。男子は生き生きと子どもに還り、女子は生き生きと母の顔、お姉さんの顔になる。慈愛に満ちて、新鮮に、輝き始める。保育士にしたらい、幼児に好かれる人になる。（遺伝子学の村上和雄教授が「命の暗号」の中で書いている「遺伝子がオンになってく」というのはこういうことなのだろうと思います。）

同級生四人なら、幼児を守って旅が出来る。そんな人類の法則を学んだ気がしました。

帰り際、園児たちが「行かないでー！」と声を上げ、泣きそうな子も居ます。

一時間弱の触れ合いで、世話してくれる人四人に幼児二人の本来の倍数の中で、普段は保育士一人対園児三十人で過ごしている園児たちが、離れたくないと叫ぶのです。私は、日本中で叫んでいる幼児たちの声を聴いたような気がしました。

中学生が幾人も涙ぐんで立ち去れない。同級生が囲んで慰めています。それを保育士さんと先生たちが感動しながら見えています。

以前、発達障害児専門の塾をしている人が、子どもを落ち着かせるために、送ってきた親に挨拶の仕方を教えることから始めると言っていました。あの子たちはそれを社会に望んでいるのかもしれない。心のかたち、絆のかたち、秩序が子ども中心になっていないことに警告を発しているのかもしれない。

保育者体験をすると、「どう生きるんだい？」という問い掛けが聴こえてくるのです。その問いかけが、浄化作用であり自然治癒力です。人間たちが、生きる理由を見つけるために、幼児たちがいる。

いい保育者に守られ、集団で遊んでいる時の幼児たちは、詩的領域そのもののようによく生きている。砂場の砂でさえ、幸せになれる。

信じ切って、頼り切って、幸せそう。

それは、宗教が示唆してきた、目標とすべき姿なのです。彼らに混じって一日過ごせば、「子育てとキャリアの両立」なんて言葉は、もはや成立し得ない。

人間（親）は、生きているだけで喜ばれる。

新美南吉の書いた「手袋を買いに」という話があります。この話を、五歳になった我が子に読んだ時のことを覚えています。二人で雪の中で過ごした時間、あーっと思わず顔を覆ってしまい、母子狐とホッと胸をなでおろした瞬間が人生の中心にあって、そこを基準に、私は考えている。

そうしていれば、「社会進出」や「自立」「自己実現」などという言葉の罫には引っかからない。

親や祖父母だけでなく、中学生の保育士体験を市の方針として進めていた茅野市の公立保育園の園長先生、主任さんたち三十人くらいと、年に一度の経過報告を兼ね、輪になって話し合っていた時のこと。

一人の主任さんが、「保育士も一日保育士体験をやるんですか？」と質問したのです。幼稚園が一つしかない茅野市では、幼児を育てている保育士さんはみな自分の子どもを公立の保育園に預けているのです。

すると、一人の園長が間髪を入れず、
「当たり前だよ、子どもが喜ぶんだから」と言ったのです。
みんな、一瞬ハッとして、「そうだった」と納得です。
保育の心が定着して来た、と私は嬉しくなりました。横で聴いていた役場の部長さんに、もう大丈夫ですね、と囁きました。

(日本は、人類にとって大切な選択肢を示せる国のような気がする。その価値を理解し、大切にしてほしい。人間は子どもを可愛がっているだけで、幸せに生きられる、ことをたくさんの人に思い出してほしい。そういう人の割り合いが、子どもの環境なんですね。その割り合いで、親子の幸せが決まっていく。だからこそ、幼稚園や保育園で、親心を耕す行事をやってほしい。)

「日本再興戦略」によって保育と教育が壊されていく

(政府の発表です)

「日本再興戦略」(平成二十五年六月十四日閣議決定)では、保育分野は、「制度の設計次第で巨大な新市場として成長の原動力になり得る分野」、「良質で低コストのサービス(中略)を国民に効率的に提供できる大きな余地が残された分野」とされている。さらに、国の成長・発展等への貢献を目的に、「規制改革実施計画」においては、保育の質を確保しつつ、待機児童の解消を目指し、改革に取り組むこととされている。

「国の成長・発展等への貢献を目的に」作られた戦略だそうです。呆れますね。「安い労働力確保のために」とハッキリ言えばいい。

この「日本再興戦略」によって少子化や家庭崩壊が進み、保育分野を新市場と閣議決定し、「低コストのサービス化」を目指すことで質の低下を招いてしまった。連動するように教師不足に拍車がかかり、教師の心の病と不登校児過去最多、というとんでもない結果が出ている。こんな状況で「国の成長・発展」などできるわけがない。

経済学者が言う「貨幣によって得られる選択肢、自由」は、欲の資本主義が仕掛けた「罠」のようなものの。

「市場原理化」で、質の片寄りが激しくなり、どの保育園に行くか、どの保育士が担当になるか、という当たり外れが、親子の一生を左右する時代になってしまっている。

マスコミのいわゆる「女性の社会進出」に重点を置いた情報を、繰り返し聴いた(親になったばかりの)若者たちに、いい園の選択ができるのか。ちゃんと選択しようとするのか、非常に気になるのです。

乳児をこれだけ長時間預ける、という「親の決断」が、子どもの成長や親子関係にどう影響し、利便性に偏りがちな判断が、後々の人生を支配していくことを理解しているのか、とても心配になります。

保育の質の低下は、実は、政府や学者の経済政策に問題があるのではなく、親たちの選択が招いたものです。

その時、いい保育園を選んだとしても、転職や退職による担当の交代はすでに日常、それは、もうみんな分かっているはず。昔のように、運動会で、卒園児たちが参加する競技を見ながら、年配の保育士が、ああ、あの子だ、すっかり大きくなって、立派になって、と笑顔で応援する風景は、ほとんど見られなくなった。保育の形は、一部の園を除いて、ここ二十年間の政府の施策ですっかり変わってしまった。

政府による規制緩和で、パートで繋いでも構わない、無資格でも構わない、となったいま、「保育の質とは？」と聞かれたら、その日の保育士の当たり外れ、そのシフトの保育士の心持ちです、と言うしかない。

幼児の相手をするのは「手法」や「手段」ではなく、「人柄」なのです。

倍率が出ないと、人柄で保育士を選べなくなる。そういう状況の中で、今、保育士による虐待が露わになっている。

この子を育てるのは、自分か、他人か、という選択があるだけで、「自分」なら子どもの過ごす時間の質をコントロールできる。交代し続ける「他人」ではコントロールできない、ということ。

「当たり外れ」は偶然ではない。親による「選択」です。

平成二十年（二〇〇八）、新待機児童ゼロ作戦に「希望するすべての人が、子どもを預けて働くことができる社会」を目指す、と書かれた時、講演を依頼してきた保育士たちは、「希望するすべての子どもが、親と一緒にいることができる社会」を目指すほうが自然で、本当の待機児童ゼロ作戦ではないのか、と言っていた。

その時、すでに保育士たちは、親たちを見抜き、見限っていたのかもしれない。政府の言う「社会進出」という「罨」に気づいていたのでしょう。

「出産退職年20万人、経済損失は1.2兆円：民間研究所試算」とエビデンスを挙げて試算した研究者たちがいました。この試算は人間の愚かさの金字塔です。それを真実のように報道するマスコミも問題です。だから、乳児と過ごす時間を「損失」と感じる親が増えるのです。子どもの願いに応えようとすることの「価値」を理解しない。

「欲の資本主義」の反対側にいるのが、「園庭で遊んでいる幼児たち」だと私は思っています。だから経済学者やマスコミは、幼児たちと人間を引き離そうとするのでしょう。

さらに、

「日本は、女性の教育レベルが高いにもかかわらず、労働市場でうまく活用されていないため、教育投資に見合うほどの利益が出ていない」（世界経済フォーラム）

母親であることを「教育レベル」と対比させ、活用と利益で人生の価値を計るように仕向ける。彼らの言葉を借りれば「教育」は「投資」なのです。「教育」が「欲」に支配されている。欲が、動機になると、子育てが行き詰る。そのことに、彼らは気づかない。

人間が感性を失っていく過程に、「乳児の存在意義」VS「学校教育の存在意義」のせめぎあいがあるのですね。

「学問」と「欲の資本主義」が人間の本来の思考とアイデンティティーを抑圧している。

それに、「福祉」が母子分離という強行手段で加わった。彼らの言葉を借りれば、「労働市場でうまく女性を活用するために」。

（政府によって行われてきた経済優先の母子分離策は、二割の自治体に幼稚園という選択肢がない状況で進められたことを、みんな意外と知らない。政府や子ども・子育て会議には、それだけ重い責任があったということ。保育を「投資」と考える人たちは、一人一人の人生、一つ一つの自治体の置かれた状況をほとんど

ど想像しない。大雑把な仕組みと枠組みで考える。「0歳児を預けることに躊躇しない親をつくり出すこと」が、学校教育の崩壊につながるということさえ、いまだに理解できないでいる。

このままでは、経済どころではないですよ、少子化はますます進む。それだけは、覚悟しておきなさいよ、と「十一時間保育を標準とし、子育て安心プランと名付けた」政治家や専門家たちに、言いたい。「子育ての」の本当の意味を理解しないあなたたちが、今のような保育崩壊を招いたのですよ、と繰り返し言いたい。)

すでに私は、衆議院に参考人や公述人と呼ばれ、繰り返し、警鐘を鳴らしました。映像が衆議院のホームページにあります。衆議院調査局発行「RESEARCH BUREAU 論究」2019年版に「子供を優先する、子育て支援」というテーマで執筆依頼され書きました。国会議員全員に配られたそうです。
[http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_rchome.nsf/63da430ca66f6757492574180016fd6e/b3bb20d8d63d8d67492584d9002f58a7/\\$FILE/2019ron16.pdf](http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_rchome.nsf/63da430ca66f6757492574180016fd6e/b3bb20d8d63d8d67492584d9002f58a7/$FILE/2019ron16.pdf)

自民党の厚労部会や少子化対策委員会でも講演しました。それでも止まらない。

だから、まだ親になったばかりの頃に、幼稚園や保育園が、子育ての喜びに気づかせてほしい、とお願いするのは、そのやり方については、「ママがいい！」にいくつか具体的に書きました。

追記：父親が育つとき

父親の一日保育者体験全員参加を目指している若い武道家男性園長から、聞いた話です。

いかにも体育会系の父親が、一日保育者体験のことを聞いて、不平顔で言ったのです。

「俺は向いてねえんだよ、こういうの」

園長は、引き下がらない。「いいからやるんだよ」

仕方なく参加したその父親がお昼寝の時間に、息子の背中をトントン叩いて寝かしつけていたのです。

すると、息子の小さな声が「おとうさん、ありがとう」

父親の目に涙が溢れます。

こういう瞬間に人間が育っていく。父親が一人生まれる。帰り際、父親は園長に向かって、「やって良かった、やって良かった」と繰り返したそうです。

父親が、自分自身を体験したのです。自分の中には、いい人間がいる。幼児だった頃の自分もいる。

男たちが園児たちに混じってそういうことに気づくと社会は「畏」から解放され、強くなる。魂の震え方を、幼児たちが男たちに教えることで、みんなが結束し、弱者を守ることで幸せになれる。

そして、「嬉しいメール」

障害児の施設で働くのが好きで、そこで子どもたちとかけがえのない時間を過ごし、でも、繰り返される指示語の強さと、それが発せられる風景に耐えられなくなってある日辞めていった、感性豊かな人からメールが来ました。

いまは結婚して子どもがいます。「子育ては自由だから」という言葉に、彼女が手に入れた世界を感じます。

こんにちは！

春ですね！お元気ですか？

息子は8カ月になり、人間みたいになってきました。かわいいです。

子育ては祈りの連続なんですね。そして私は親からのたくさんの祈りで大きくなってきたんだなあとしみじみしています。

施設で働いていたときみたいに、子育てでいろいろな景色をみています。

働くといろんな制約やきまりがあるけど、子育ては自由だから楽しいですね（笑）

寝不足だけががんばります。

かずさんも講演がんばってください。

「子育ては自由だから」という言葉が、すがすがしく、心に残ります。多分、私はそういうことを言いたかったのだな、と思います。

永遠とか、生き甲斐とか、責任とか、祈りとか、思い出とか、自分の価値を浮き彫りにする、「本当の自由」がそこにあって、人間は、幼児を抱き、守ってきたんだ、と読み取ります。

こういう言葉に接すると、いい翻訳者、伝令役にならなければ、と身が引き締まる思いがします。

（「ママがいい!」、読んでみてください。ツイッターのフォロー、フェイスブックの友達リクエスト、ブログは「シャクティ日記」と言います、推薦、拡散お願いします。幼児たちの本当の役割に、「気づく人の割り合いなのです」、いま一番大切なのは。松居 和）



（レビューより、）

これから子供を持つとする夫婦、乳幼児を持つ夫婦、小さな孫を持つおばあちゃん、おじいちゃんなど多くの日本人の読んで欲しい、何よりも政治家にこそ読んで欲しいと強く思う。

読み進めると、驚愕、義憤、哀しみ、あまりにも酷い現実を知らされ暗澹たる気分になったが、最後の二章では希望と勇気が湧き嬉し涙が出た。その根底にあるのは、子ども達、母親、父親、家族、そして日本人と日本に対する溢れんばかりの愛だ。何度も出てくる「利他の心」という言葉。「逝きし世の面影」(渡辺京二著)に触れ、

欧米人が見て子供の楽園パラダイスと書き残したかつての日本の風景こそが母性的な「社会で子育て」の真の姿であるという著者の思い。私の思いもシンクロした。



PTAの講演会で、著者の話を聞いて感動しました。その感動を何度でも思い出して、子供達と向き合いたいと思って購入しました。イライラした時に読み返すと、子供達への愛情を蘇らせてくれます。内容は1時間の講演と多く重なっています。心の柔らかい感性豊かな人なら、本だけを読んでも、きっと感動できると思います。でも、私の場合は、講演を生で聞いたから、心に響いたのではないかと思います。

子供達は私の自由を妨げる。私はもっと自由でいたい。出産も結婚も間違いだった。早く一人になりたい、そう思って暮らしていた私に、自由の概念が不自由を、不満を生む。不自由なことは幸せなことだと断言して、新たな価値に目を開かせてくれました。断言してあるところが良いです。子どもが親を育てるということ、これ以上具体的に直接的に述べている本はありません。我が家の子供達は既に3歳と5歳です。出版は5年前。出てすぐに読めればもっと良かったです。オススメです。

（追加のエピソード）

父親のお泊まり保育

もう、30年前のことです。

奈良の真美ヶ丘保育所という公立園に、園児を扱ったら魔法使いのような、竹村寿美子先生という園長先生がいました。私の第一師匠で、保育士たちに丸太ん棒を一本与えて、「きょうは、これで保育をしてごらん」と言うような人。

ある年、園児の保護者の中に子どもに無関心な三人の父親がいたのです。

「子どもに関心さえあれば、どんな関心だっていいの。関心があり過ぎなんてことはない。その関心が、少々ひん曲がっていたっていいの。それはその親子の運命。良くないのは無関心な親です。こういう親は人間として育たない。それが子どもや母親の一生を左右する」

と竹村先生は常々言っていました。

その三人の父親を、先生は園長命令で、園児たちのお泊まり保育に引っ張り出したのです。そういうことが言える時代でもありました。簡単にニコニコそういうことが出来る、太陽のような気合いの人でした。

「敷地の中に居ればいいの」。ただ、それだけ。

幼児百人に24時間囲まれると父親の人生が変わる。

子どもに無関心だった三人の父親が、24時間で変わりました。

お泊まり保育のあとたった三人で「父の会」を結成しました。こういうところが、男たちの単純でいいところだと思うのです。そして、私を東京から奈良まで呼んで、必死に、その時の体験を話したのです。

「しょうもない父親」だった三人が、「なんて人生を送ってたんだろう」と口々に、真剣に言うのです。

子どもに無関心だった、ミナミの帝王と呼ばれる大酒飲みの父親が、朝早く、一人二人と子どもが起き始めた時、それを見ていて、なぜか涙が出てきた、と私に言いました。

横で笑っている園長先生のごしてやったりという顔が、私には「保育」の原点としてあるのです。子どもたちの中に、一人ずつ大人たちを漬け込む。それで保育園は生きてくる。

ある私立保育園に講演に行きました。

平日の午前中に、ほとんどの母親たちが来ていました。笑いあり、涙あり、熱心に耳を傾けてくれる母親たちに、幼児といるこの特別な時間をどう過ごすといいか、子育ては親たちが自分のいい人間性に感動することです、と話しました。70歳になる園長先生は気合の入った方でした。70人定員の園で、お泊まり保育と、キャンプには親も含めて200人が参加するそうです。国が仕切っている今の仕組みの中で、逆風の中、こういう方が親心を耕し、信頼関係を育てている姿をみるのは嬉しいし、励みになります。数日後、素晴らしい感想文がたくさん送られてきました。

親父の会／園での父親の交流が学校でのイジメを減らす

十年以上前に講演した幼稚園へ行きました。その時の講演をきっかけに父の会ができて、それが園でとても大切な存在になっている、という嬉しい報告をお母さんたちからいただきました。先週もそんな園で講演

し親父の会の役員たちとピザを食べました。父の日が近づくと改めて父親の役割り、そしていまこそ父親たちが幼児と過ごす時間がとても求められている、と思います。

東漸寺幼稚園の父の会のページは、一年間にこんなに色々出来る、という道標になります。ぜひご覧下さい。お父さんたちの幸せそうな写真が大きな子どもたちのようで、子どものための父の会というより父親のための父の会、という感じが自然でいいのです。それを見て、男の子たちもきっといつか父親になりたいくなるのです。少子化対策、親父の会版です。

(いまの少子化の一番の原因は、三割の男たちが一度も結婚しない、男たちが父親になる幸せを見失っていることにあるのです。)

父親たちが集う意味

夫の暴力に苦しむ母親が増えています。小学校のPTAで講演すると特に感じます。講演後に相談を受けることがあります。競争原理に煽られ、操られ、生きる力を失いつつある男たちに優しさや忍耐力がなくなってきたのです。心にゆとりがない。子どもには優しい父親が、妻に暴力を振るう、というケースもあります。子煩悩な父親、(嫌々ながらも「1日保育士体験」に来て、「もう一度やりたい」とアンケートに書く父親)には希望がありますが、子どもに関心を示さない父親が暴力を振るい始めると危険です。

早いうちに父親の親心を耕しましょう、と私は保育者に呼びかけます。「母親の精神的健康」は、保育所保育指針に掲げられている「子どもの最善の利益を優先する」という言葉に、一番かなっているのです。

一日副担任などをやってもらって、一人ひとり幼児の集団に漬け込むのが効果的です。(「子どもと遊んであげて」などと言う抽象的な言葉より、「〇〇を教えてあげて」と言うような具体的なことの方が父親は得意です。)父親の顔が数時間で変わります。ニコリともしなかった表情が園児に囲まれて和みます。すると、家庭の空気が温かくなる。

父親が園で幼児に混ざることによって家庭内暴力が奇跡的に止まることがあります。暴力を振るうのに誰にも相談に行かない。そういうプライドの高い頑なお父さんが「園の行事」という助け舟に救われ、本来の姿を取り戻すところを何度も見ました。

父親だけ集めて、年に数回酒盛りをさせる幼稚園があります。お母さんと子どもたちはいなくてもいい。父親同士が仲良くなることが目的です。

「父親同士が知り合いかもしれない、友だちかもしれないという意識を、幼児期に子どもたちに持たせることができれば、小学校や中学校でいじめはなくなるんです」と園長先生が断言します。「本当は友だちでなくてもいいんです。お父さん同士が友だちかもしれない、子どもたちが日常的にそう思うことがいいんです」。部族の感覚。インドの田舎の村なら当たり前のこと。

お父さんたちの酒盛りから野球のチームができたり、釣りの同好会や、季節の行事が生まれます。それはやがて学校での「オヤジの会」に進化します。「利害関係のない友だち」、競争社会で生きていければいいほど、それが重要です。卒園後も一生続くと良いのです。

大人たちの部族的意識が子どもたちを安心させ、学校での生活が安定してくる。

みかんの皮

先日、何かで読んだんです。保育の「専門家」が、「3歳くらいの子どもにみかんの皮を剥いてやっている母親を見た。なぜ、剥きかたを教えてやらないのだ。親は、甘やかすからダメなんだ。保育園に行っていればちゃんと剥けるようになっていく」と言う。

本当に腹が立ちます。

保育や経済の「専門家」たちによって、子育てと教育の混同が始まり、子育てに正解があるような気がして親たちが親心を失っていく。子どもたち、保育士、そして教師の順に追い詰められている現状を目の当た

りにしている私は、些細に思えるこういう種類の言葉に敏感になっているのです。

その人がそういう考え方をするのはいい。

でも、「専門家」のフリをして、正しいことのように言う。すると、人間たちが、「可愛がる」という、親としての幸福感を忘れていく。

厚労大臣が「子育ては専門家に任せておけばいいのよ」と言い、経済財政諮問会議の座長が「0歳児は寝たきりなんだから」と言い母子分離を奨励する。そのことに誰も疑問を持たなくなるのです。

私の祖母は、私が中学生になってもよくみかんの皮を剥いてくれました。ていねいに綺麗に剥いて、スジまでとって、両手の中でクルクルと回してから、「おたべ」と言って手渡すんです。

もちろん私はその頃みかんの皮が剥けるようになっていました。中学生ですから。でも、祖母が剥いてくれるのをじっと待っていたことが祖母の思い出の中で一番よく憶えているんです。祖母が、とても嬉しそうだった。それが私には、嬉しかったんです。

みかんの皮は剥いてもらっていいんです。

中学で全校生徒に講演する

中学校で全校生徒に講演する時は、一週間くらい前から緊張します。その時、すでに、彼らが私を育てようとしているのがわかる。本気で、真剣に付き合わないと思捨てられる。

「私が一人で公園に座っていれば、変なおじさん。でも二歳児と座っていれば、いいおじさん、なのです。この不思議な仕掛けに気づいて、その仕組みに感謝しないと、人生の目的を見失います。二歳児には特別な役割があるのです」と、育て合う基本を説明。

「子育ては、選択肢のない関係の中で、親が子どもにいい人間性を引き出してもらうこと。自分のいい人間性に感動し、男女が心をつにすること。幼児たちが本当の絆を育てるのです」、「結婚は自ら進んで自由を失うこと。出産はそれに輪をかけて自由を失うこと。そこに幸せがなかったら人類は滅んでいきます」、「不自由に喜びを感じるのが『絆』です、これがなければ生きていけない、楽しくない」と孤独にならない方法を解説します。

「信じ切って、頼り切って、幸せそう。四歳児くらいが一番完成している人間です。宗教の求める人間の姿がそこにある。四歳児を拝み、目標にしていれば人間は大丈夫、それがこの国の伝統です。あの人たちが社会の人間性を整えます。自立している人間など一人もいない」と150年前に欧米人が書き残した「この国の」素晴らしさ、父親と幼児が一体でニコニコ暮らしている描写を「逝きし世の面影」（渡辺京二著）の第10章「子供の楽園」から引用し、伝えます。

（世界中で江戸ほど玩具屋の多い街はない。江戸で男たちが十人座っていると、それぞれ幼児を抱いて、自慢話をしている。日本の子どもは六歳になるまで父親の肩車を降りない。日本人は絶対に子どもを叱らない。それなのに、六歳にもなるとみんないい子になる。不思議なメッセージが驚きを以って伝えられます。）

一時間一生懸命説明すると、「夢を（欲）持ちなさい」「無限の可能性がある」と、「欲を捨てる」幸福論と反対のことを言われ鈍り始めていた中学生たちの感性と本能が蘇ってくるのです。聴いている子どもたちの表情やザワつきでそれがわかります。

感想文に、

「自分が親になって困ることより『いいな』と思う方が多くなる日が来ると思うと、とても楽しみになりました」

「親になりたいと思いました。今日のお話しは、私の成長につながったと思います」

「私たちは親に育てられているだけではなく、私たちも親を育てているとゆう話を聞いて、なんていえばいいかわかりませんが、話にひきつけられました」

「よくわからなかったけど、聞いてよかった」

「いつでも無言の愛というやつはとてもいいと思っております」

「話が難しく思いましたが、生きていくうえでは大切なことだと思いました」

「自分も小さい子たちにはげまされて、育てられたいです」

「幸せについて、きちんと語る人はめずらしいです。ぜひ、次の講演も頑張ってください」

「非常に実になるお話を聞くことができ、とても嬉しいです。『幸せのものさし』という言葉をよく使われていましたが、あれは自分の価値観ということなんですか。自分も職場体験で幼稚園に行き、園児たちが自分の行動一つ一つに笑顔を見せてくれて、松居さんの『幸せのものさし』というものがよくわかった気がしました。子を育てるという行為が、逆に自分を育てることにつながるという話が一番お話の中で共感でき、印象に残りました。松居さんの色々な経験談を聞いて、本当に自分の物事を見る目が変わりました。とても良かったです」

「今日、松居先生の話聞いて心にのこったことは、園長先生がうさぎになってくださいと言ったとたん、お父さんたちがうさぎになったことです。園長先生は、お父さんたちをうさぎに変えることができずごいし、お父さんたちは子どものために、はずかしがらずにうさぎになるのもすごいと思いました。ぼくは、この話を聞いて、弟がほしくなりました。」

「私は、『親になる幸せ』を聞いて、不思議な気持ちになり、同時に、早く大人になって子どもを産んでみたくなりました。私が今生きている。それだけで周りの人たちが笑ってくれる。それだけで幸せだと思いました。」

「ぼくの妹はダウン症候群で、上手く話せません。いろいろ困ることがありますが、ぼくは妹がいてとてもよかったと思いました。」

「ぼくは、親に幸せをあたえていると聞いて、安心しました。僕もはやく親になって、子どもから幸せを受けてみたいです。」

中学生は理解する。理解したがっている。その理解が、弱者に優しい社会をつくれます。

教育が「幸せについて、きちんと語る」時がきているのです。

小学校五年生から高校を卒業するまで、毎年三日間でいい、生徒たちが保育体験をして幼児たちと輪になって踊れば、「教育」が説明できなくても幼児たちが人間の成り立ち、社会の仕組みを教えてください。予算も専門家も要らない。幼児たちがいる。

母親から送られたてきた詩

講演後、一人の母親が詩集を送ってくれました。「話が進むに従って、私の中で不思議に思っていた問題が少しずつ解かれていきました」と添えられた手紙に書いてありました。その中から一編を、衆議院の「税と社会保障一体化特別委員会」で公述人を頼まれた時に読みました。いま、保育施策に欠けているのは、詩人の視点と感性なのです。

「愛し続けていること」 詩／小野省子

いつかあなたも 母親に言えないことを
考えたり、したりするでしょう

その時は思い出してください
あなたの母親も 子どもには言えないことを
ずいぶんしました

作ったばかりの離乳食をひっくり返されて
何もわからないあなたの細い腕を 思わず叩いたこともありました
あなたは驚いた目で私をみつめ
小さな手を 不安そうにもぞもぞさせていました

夜中、泣きやまないあなたを 布団の上にほったらかして
ため息をつきながら ながめていたこともありました
あなたはぬくもりを求め
いつまでも涙を流していました

私は母親として 自分はずかしいと思いました
だけど、苦しみにつぶされることはなかった
それは、小さなあなたが
私を愛し続けてくれたからです

だからもしいつか
あなたが母親に言えないことを 考えたり、したりして
つらい思いをすることがあったら 思い出してください

あなたに愛され続けて 救われた私が
いつまでも
あなたを
愛し続けていることを

人生の質は、どれほど弱者に愛されたか気づくことで決まる、と詩人は示唆します。

親が子に愛され、その確かさに感謝する。子どもたちは「信じること」が生きる力だと遺伝子のレベルで見極める。

生きる力は、自立することではないのです。信頼の連鎖に身を置くこと。

我々人間のすごいところは、自分を「いい人間」にしてくれる者たちを自ら産み出す、ということ。

政治に関わる人たちが、幼児と会話する人の心の声に耳を傾けてほしい。

民主主義も、幼稚園も、保育園も、学校も、この歴史の浅い巨大な仕組みは、親が親らしいという前提のもとに創られていることを忘れないでほしい。

「生きる力」は経済力ではない。子どもたちに信じてもらうこと、それが「生きる力」、「生きる動機」だったのです。

古（いにしえ）のルールを語ってくれる詩人たちの言葉に、時々でいいから心を震わせてほしい。

子どもを産み育てることは、宇宙から与えられた尊い役割。自分の価値を知り人は納得する。子どもが親を育てることは、宇宙の動きそのもの。一人では生きられないことを宣言し、調和への道筋を照らす。

自然治癒力は、あちこちに、形を変えて存在するのです

ある日、講演に行った保育園で父親たちが「ウサギ」にさせられていました。

保育士たちが、ウサギのかぶり物を父親の人数分用意しておいて、私の講演が終わると、「ハイ、お父さんたちは、ウサギになってくださ〜い！」と手渡したのです。

すると、お父さんたちはウサギになるしかない。

これは衝撃でした。宇宙の法則が、突然目の前に現われた気がして、鳥肌が立ちました。

園長は父親をウサギにする「権利」を持っていた。社長や校長は持っていない。

宇宙から与えられた権利に違いない。すぐに、そう思いました。

最近「権利（けんり）」と呼ばれるもののほとんどが「利権（りけん）」なのです。でも、園長が手渡された「これ」は、そうではない。この「権利（けんり）」で、子どもが安心して幼児期を過ごせる環境を勝ち取る闘いに、勝てるだろうか。勝てるかもしれない、と私は思ったのです。

保育園でウサギにさせられたら、誰だって少しは変わる。

引きつった顔でいやいやかぶった父親も、三分もすればウサギです。保育園には、園児にそういう働きをさせる気配がある。そこで、競争社会で固まっていたお父さんたちの心が、溶け出す。

みんなで、やればできるのです。

見回すと、みんながやっている。なぜだろう、と思う隙もなく、馬鹿げた「同志意識」が生まれる。人生なんてそんなものです。

それを見て、喜んでいたのが母親たちでした。

父親たちも、実は、ウサギになりたかった。幼児たちと一体になることで、人間たちは、自分の中にある「願い」を感じる。そして、この宇宙に不公平はない、と気づくのです。

「平等」というのは、勝ち取るものではなく、気づくもの。

昔、男たちは年に二、三回、「祭り」の場でウサギに還っていた。
子どもに還ること、宇宙にもう一度近づくことを皆で祝っていた。
自分の中に、三歳だった頃の自分がある。それを確認していれば、人間は、自分しだいで幸せになれることに気づく。幸せは、自分の心持ちしだい、と理解すれば、男たちは落ち着きます。

この仕掛けの素晴らしいところは、父親たちが全員、一人残らず全員、三歳だったことがある、ということ。

誰もが、砂場の砂で幸せになった。

全員、そこにいた。（これは繰り返し思い出すべき、人生の「印象」なのです。）

保育園でウサギにさせられながら、男たちがふと気づくんですね。「私は、以前、ここにいた」と。

だから、三歳までは全員が可愛がられなければいけない、と思いますね。

目標とすべき自分が、心の中にいると感じ、幼児を眺めながら、自分は、絶対に一人では生きられなかったことを思い出して、記憶や知識の中の「絆」は世代を超えるんです。お盆には、死後の世界にまでつながっていく。

そこで、再び「踊る」。この宇宙に不公平はない、と唱えながら。

「人間は幼児という神様、仏様、絶対的弱者の前では、正しい方向に進むしかない。たとえそれがウサギになることであっても」

ここ十年間の国が主導する保育の質の低下を見ていると、私でさえ、心が折れそうになります。

しかし、私たちには、幼稚園や保育園を使って、父親たちをウサギにするという方法が与えられている。

この不思議な権利をすでに手にしている「園長」や「主任」たちが、その役割の重要性に気づけば、チャンスはまだある。

「利権を権利」と勘違いしている学者や政治家たちの思惑から親たちを離し、経済活動のみを「社会」と定義し「進出」を促す「畏」から少しのあいだでいい、距離を置かせ、別のオプションがあることに気づかせる。

皆が時々ウサギになって、自らが生み出した「命」と遊ぶ。その命を育てることに「感性」を集中させることができれば、それが一瞬であっても、この国を少しずつ耕し直すことは可能です。

社会の働きを主導するのは「幼児たち」なのだ、と信じて、この時期にしかできない体験を親たちにさせて、その時間の価値を再び高めていけばいいのです。

予算など、ほとんどかからない。効き目は、結構あります。

園と家庭の位置関係を確認するための、第一歩になる。学校に入るまでに、親たちを「まあまあの親」にしておけば、学校もずいぶん楽になる。

私が見るかぎり、この方法は、さほどの抵抗もなく、どこの園でもできること。園長たちが、その気になればできること。

これに似た方法をいくつか「ママがいい！」に書きました。一日保育体験は特に有効ですし、県全体で取り組んでいるところもあります。ぜひ、試してください。

経済学者や政治家たちの思惑や畏については、一定の数の人たちがその危険性を理解すれば、必ず、仕組みに変化が起こります。

FBの友達リクエスト、ツイッターのフォロー、どうぞ、よろしく願いいたします。ブログの更新など、お知らせします。

（ブログ：<http://kazu-matsui.jp/diary2/>、ツイッター：[@kazu_matsui](https://twitter.com/kazu_matsui)）